

せっしゃおやかた　もう　おたちあい　うち　ごぞんじ　かた
拙者親方と申すは、御立合の中に御存知のお方もご

え　ど　た　にじゅうりかみがた　そうしゅう
ざりましょうが、お江戸を立て二十里上方、相州

お　だ　わ　ら　いっしきまち　す　あおもものちょう　のぼ
小田原、一色町をお過ぎなされて、青物町を登

い　らんかんばしとらやとうえもん
りへお出でなさるれば、欄干橋虎屋藤右衛門、

ただいま　ていはつ　えんさい
只今は剃髪いたして円齋と名のりまする。

が　ん　ち　ょう　お　お　つ　ご　も　り　こ
元朝より大晦日まで、お手に入れまする此の

とうじん　ういろう
薬は、昔、ちんの国の唐人、外郎という人、わ

ち　ょう　き　みかど　さんだい　おり
が朝へ来たり、帝へ参内の折から、この薬

こ　お　もち　いちりゅう　かんむり
を深く籠め置き、用ゆる時は一粒づつ、冠

ま　とりいだ　よ　みかど
のすき間より取出す。依ってその名を、帝より

とうちんこう　たまわ　すなわ　もんじ
「頂透香」と賜る。即ち文字には、「いた
だき、すく、におい」と書いて「とうちんこう」と

こ　こと　ほかせじょう　ひろ
申す。只今は此の薬、殊の外世上に弘まり、ほ

にせかんばん　いだ　お　だ　わ　ら
うぼうに似看板を出し、イヤ、小田原の、

はいだわら　だわら　すみだわら
灰俵の、さん俵の、炭俵のと、色々に申せ

ひらがな も しる
ども、平仮名を似って「ういろう」と記せしは親方

たちあ うち あたみ とう
円齋ばかり、もしやお立合いの内に、熱海か、塔

さわ とうじ いで また いせ ごさんぐう
の沢へ湯治にお出なさるか、又は、伊勢御参宮

おり かど のぼ
の折からは、必ず門ちがいなされまするな。お登

みぎ かた くだ ひだりがわ はっほう
りならば右の方、お下りならば左側、八方

や むね み むねぎよくどうづく はふ
が八つ棟、おもてが三つ棟玉堂造り、破風に

きく きり ごもん しゃめん けいず
は菊に桐のとうの御紋をご赦免あって、系図

くすり さいぜん かめい じまん
正しき薬でござる。イヤ最前より家名の自慢

かた しょうしん
ばかり申しても、ご存知ない方には、正身の

こしょう まるのみ しらかわよふね いちりゅう
胡椒の丸呑、白河夜船、さらば一粒たべ

きみあ
かけて、その気味合いをお目にかけてみましょう。

ま こ いちりゅうした
先づ此の薬を、かように一粒舌の上にのせまし

ふくない おさ い
て、腹内へ納めますると、イヤどうも言えぬは、

い しん はい かん な くんぷうのんど
胃、心、肺、肝がすこやかに成って、薰風喉

きた こうちゅうびりょう しょう ごと
より来り、口中微涼を生ずるが如し、

ぎょちょう めんるい くいあわ ほか
魚 鳥、きのこ、麵類の喰合せ、その外、

まんびょうそっこう ごと
万病速効あること神の如し。

きみょう
さて、この薬、第一の奇妙には、舌のまわること

ぜにごま に
が、銭独樂がはだしで逃げる。ひょっと舌がまわ

だ や たて じゃ
り出すと、矢も楯もたまらぬじゃ。そりゃそりゃそ

まわ
らそりゃ、まわってきたは、廻ってくるは、アワヤ

のんど ぜつ げ しおん
喉、サタラナ舌に、カ牙サ齒音、ハマの二つは

くちびる けいちょう かいごう
唇の軽重、開合さわやかに、アカサタナ

ハマヤラワオコソトノホモヨロオ、一つへぎへぎに、

ぼん ごめ
へぎほしはじかみ、盆まめ、盆米、盆ごぼう、

つみたで まめ さんしょう しょしゃざん
摘蓼、つみ豆、つみ山椒、書写山の

しゃそうじょう ことめ
社僧正、粉米のなまがみ、粉米のなまがみ、こ

しゅす ひじゅす
ん粉米のこなまがみ、儒子、緋儒子、儒子、

しゅっちゃん おや かへい こ
儒珍、親も嘉兵衛、子も嘉兵衛、親かへい子か

ぐり ふるきりぐち
へい、子かへい親かへい、ふる栗の木の新切口、

雨^{ばんがっぱ}が^{きさま}っぱか、番合羽^{きさま}か、貴様の^{きさま}きやはんも
かわぎ^{われら}やはんわれら^{しっかわ}皮脚絆、我等が^{しっかわ}きやはんも皮脚絆、しつかは
ば^まかま^{みはり}袴のしっぽころびを、三針^{ちよとぬ}はりながにちよと縫う
て、ぬうて^わちよとぶんだせ、かはら^{なでしこ}撫子、野石^{のぜきちく}竹、
の^{によらい}ら如^み来、の^むら如^む来、三の^むら如^む来に六の^むら如^む
来、一^{いっすんさき}寸^{こぼとけ}先のお小^{きやる}仏に、おけつ^{きやる}まづきやるな、
ほ^{ほそみぞ}そみぞ^{きょう}細溝にど^{なまだら}じよによ^{なら}ろり、京^{なら}の生^{なら}鱈、奈良^{なら}なま
ま^{まながつお}ながつお^{しごかんめ}学^{ちやた}鯉、ちよと四五貫目、お茶^{ちやた}立ちよ、茶^{ちやた}立ちよ、
ち^{ちやっ}やつ^{あおだけちやせん}と立ちよ茶^{あおだけちやせん}立ちよ、青^{あおだけちやせん}竹茶^{あおだけちやせん}煎で、お茶^{あおだけちやせん}ち
やと^く立ち^くや。来^くるは来^くるは、何^くが来^くる。高^{こうや}野^{やま}の山^{やま}の
お^{こぞう}こけ^{たぬき}ら小^{はし}僧^{はし}、狸^{はし}百^{てんもく}匹^{てんもく}、箸^{はし}百^{てんもく}ぜん、天^{てんもく}目^{てんもく}百^{てんもく}ば
い、^{ぼう}棒^{ぶぐ}八^{ばぐ}百^み本。武^み具^み、馬^み具^み、武^み具^み、馬^み具^み、三^みぶ^みぐ^みば
ぐ、^{あわ}合^むせて武^{きく}具^{くり}馬^{きく}具^{くり}六^{きく}武^{くり}具^{くり}馬^{きく}具^{くり}、菊^{きく}、栗^{くり}、菊^{きく}栗^{くり}、
三^み菊^み栗^み、合^むせて菊^{むぎ}栗^み、六^{むぎ}菊^み栗^み、麦^みご^みみ^み麦^みご^みみ^み、三^み麦^み
ご^みみ^み、合^むせて麦^{むぎ}ご^みみ^み六^{むぎ}麦^みご^みみ^み、あ^{なが}のな^{なが}げ^{なが}しの長^{なが}な

ぎなたは、^た誰がなげしの^{ながなぎなた}長 薙 刀 ぞ、向こうのご

まがらは、^え荏の^{ごま}胡麻がらか、^{まごま}真胡麻がらか、あれこ

そほんの^{まごま}真胡麻がら、^{かざぐるま}がら^{まごま}piiがら^{まごま}pii 風 車、お

きゃがれ^{ぼし}こぼし、おきゃがれこ法師、ゆんべもこぼ
して又こぼした、たあぷぽぽ、たあぷぽぽ、ちりか

ら、ちりから、つったっぽ、^{いっちょう}たっぽだっぽ 一 丁

だこ、^お落ちたら^に煮てくを、煮ても焼いても喰われぬ

ものは、^{ごとく}五徳、^{てっ}鉄きゅう、^{ぐま}かな熊^{いしぐま}どうじに、石 熊、

^{いしもち}石 持、^{とらぐま}虎 熊、^{なか}虎きす、^{とうじ}中にも、^{らしょうもん}東寺の羅 生 門

^{いばらぎどうじ}には茨城童子がうで^{ぐりごんどう}栗 五 合つかんでおむしゃ

る、かの^{らいこう}頼 光の^{もとさ}ひざ元去らず、^{ふな}鮒、きんかん、

^{しいたけ}椎 茸、^{さだ}定めてごたんな、^きそば切り、そうめん、う

どんか、^{ぐどん}愚鈍な^{こしんぼち}小新発知、^{こだな}小棚の、^{こした}小下の、^{こおけ}小桶

に、^{みそ}こ味噌が、^あこ有るぞ、^{しゃくし}こ杓 子、こもって、こ

すくって、こよこせ、おっと、^{こころえ}がってんだ、心 得

かわさき かながわ ほどがや とつか
たんぼの、川 崎、神奈川、保土ヶ谷、戸塚を、走

す さんり
って行けば、やいとを摺りむく、三里ばかりか、

ふじさわ ひらつか おおいそ こいそ しゅく
藤 沢、平 塚、大 磯がしや、小磯の 宿 を七つ

そうてん そうしゅうおだわら
おきして、早 天 そうそう、相 州 小 田 原 とうち

かく きせんぐんじゅ
んこう、隠れござらぬ貴 賤 群 衆 の、花のお江戸の

い わ
花うるろう、あれあの花を見て、お心を、おやはら

うぶこ は こ いた こ
ぎやという、産子、這う子に至るまで、此のうる

ひょうばん
ろうのご 評 判、ご存知ないとは申されまいまい

つの
つぶり、角 だせ、棒だせ、ぼうぼうまゆに、うす、

きね はめ
杵、すりばちばちばちぐわらぐわらぐわらと、羽目

こんにち い いづれもさま あ
をはずして 今 日 お出での何 茂 様に、上げねば

いき ひ とうほう
ならぬ、売らねばならぬと、息 せい引っぱり、東 方

もとじめ やくしによらい しょうらん
世界の薬の元 締、薬 師 如 来 も 照 覧 あれと、

うやま い
ホホ 敬 って、うるろうは、いらっしゃりませぬか。